

第二句集

『雪稜線』



露日空うすき化粧けはひの子守り妻

(昭和三〇年)

作者も三六歳頃の作。「長女園子五句」と前書のある一連の作の五句目にある。実は、この第一句に「秋暁の泪のひかるややを抱き」があり、子の涙を眺める中にも、みずみずしい生命への共感を見る。前年に結婚した八束にとつては、二十歳代から三十歳代前半にかけての紆余曲折を経た後の、いちばん幸福な時期だったのでないか。

「露日空」とは八束の造語か。朝露のしつとり感を曳いたような晴天を思い浮かべる。その青空の下、「露」なごりのひかりに「うすき化粧」の若々しい妻が照らされて、その美しさが引き立つ。「うすき化粧(けはい)」には、現代語の「薄化粧(うすげしょう)」では出ないやさしい表情がある。さらに、そこには子の生命を育む母親としての妻の表情もある。「露」というと、「はかない命」の象徴として使われてきたが、この句では「子」の生命を映して、「露」の光がいきいきと働いているところにも新鮮さがあるろう。抒情性の回生を唱えた頃の八束の代表的作品の一つといえよう。

鍵穴に雪のささやく子の目覚め

(昭和三〇年)

「鍵穴」という無機的な素材を用いながら、たいへん抒情的に仕上がっている句。「鍵穴」は内と外との世界をつなぐ窓口でもある。鍵穴から部屋の中をのぞくというのは、よく見るシーンだが、音が入り込んでくるというのは珍しい。それまで眠っていた子が、ふと目を覚ましたまま、しばらくしずかにしている。それは、鍵穴を通して雪の降る音が聞こえてくる。それも、さらさらとささやくように聞こえてくる、というのだ。メルヘン的な装いの中にもなんと静謐無垢な時間が流れていることよ。

もちろん、この句からは、三好達治の詩「雪」が思い起こされるが、太郎次郎を眠らせる雪の詩は、日本古来の家屋であるのに対して、この句は都会的で近代的な佇まいを感じさせる。また、三好詩では子どもは二人だが、この句では一人。時代の流れの中から現代の詩を紡ぎだそうという八束の姿勢が見えてくる。

荒海や雪しよ囲がきのかげのかごめ歌

(昭和三〇年)

この年は冬に入って、蔵王一三句、男鹿半島九句と、大きな旅が二つ続い

た。蔵王の収穫は（樵去りてより鈴きこゆ木魂とも）であろうか。「山上のドッコ沼」での作とある。蔵王の雪山の幻想性の連作の中で、視覚を追うように鈴の音が、木々の精の声として忘れられたようにあとから届いてくるとうのだろう。

それに対して、男鹿半島の諸作は、（崖の上の墓に雪ふる漁港かな）に始まり（寒林の梢（うれ）に浪だち浪昏るる）に終わる。ここには、幻想などの入り込む隙もないような厳しい荒涼とした風景が展開される。それらの中で、冒頭の句では、荒々しい風景の中から無心に遊ぶ子どもたちの「かごめ歌」が聞こえてきたというのだ。

荒海を前にして、厳しい寒さであろうに、子どもたちは負けていない。雪囲に守られながら、荒海のとどろく音に返すような声で、元気に遊んでいる。自然環境の厳しい辺境に冬を過ごし、子どもたちはたくましく育つ。そのことに八束は心を熱くしたのだ。

ところで、「雪囲（しよがき）」は、この地域で用いられている語であろうか。「ゆきがこい」の音韻にはない民俗的な根っこを感じさせる。風土の長い時間の中で錬られ、ものの実質に限りなく迫った音韻の確かな存在感があるのだ。また、力強くよどみない「あらうみや」に対して、中七以下の三つの「が」「げ」「ご」の濁音も、上すべりのない風土性を伝えよう。

「荒海の波音（＝風土）」と「子ども声（＝いのち）」とが織りなす、もう一つの男鹿の「かごめ歌」もいつまでもつづく。

なさけなくなる歌よみの寝酒かな

（昭和三十一年）

生活の不如意に対する自嘲句とでもいおうか。この句に歌人の木俣修が（原稿料も明日着くらむ）と付けて慰めてくれた、というエピソードが残る。「寝酒」が冬の季語だなんて、現代の若者は知っているかどうか。しかしながら、背景を知らずにこの句に接するならば、わびしさや情けなさというよりも、自己戯画化のゆとりの中に少々の矜持さえ感じとれるのではないか。なにしろ、「な」の音のくり返しが、くねくねと曲がりゆく散策の道にも似て、読むものをリラックスさせてくれるのだ。

そして、（な「酒」無くなる・・・ね「酒」かな）。このオチを、八束が意識したかどうかはしらないが、句に茶目っ気をちらっと感じてしまうのは、私だけだろうか。

パイプもてうちはらふ万愚節の雪

(昭和三一年)

ユーモアの効いた句をもう一つ引こう。八束は煙草は飲まないから、この句はあくまで虚構。作者も、「四月馬鹿にあやかってインバネスを着た私の滑稽なフィクション」(『俳句研究』昭和六一年二月号)と明言しているとおりだ。だが、事実かどうかは作品においては重要ではない。この一句を、何の前知識もなしに素直に読むことにしたい。

この句では、降りかかる雪を作者が「手」ではなく「パイプ」で、ひよひよいと払い続けている。払っても払っても、雪のほうがはるかに多い。しかも、こんな四月になつての嘘みたいな雪である、というのだ。雪も嘘みたらし、パイプで雪を払うのもエイプリルフールで騙されているみたいだというのだろう。

この「雪」を払うしぐさから、「人生の苦難を払って」などと暗喩めたことを連想したくもなるが、この句のおもしろさは、むしろ他愛ないことに夢中になっている自分を楽しんでるところにある。嘘でもいいではないか、難事多き日常から逃れてたまにはこんな手遊びも、という感じ。どこか孤愁めいていないでもないが・・・。

八束にしては五五八という異色のリズムをもって、くつろいでいるようにも見せている。

つばくらの鈴たちのぼる雪の峯

(昭和三一年)

「雪に憑かれ雪山をさまよひあるく、その三、志賀高原発哺 十七句」と前書のある第一句めの作。志賀高原発哺とは、昭和八年頃に三好達治が療養していた地でもある。八束もその詩人の足跡を求めて訪ねたのだろう。

この句の「雪の峯」は、雪がいま降っている峯ではなく、雪が止んで晴れ上がった峯をいうのであろう。華麗な比喻によって澄み切った空が、雪の峯の上にとこまでもひろがる。八束の遅き青春の心音が伝わるような句だ。呼び合うように想い起こすのは、以前にも引いた、

春の鶯寄りわかれては高みつつ 飯田龍太(『百戸の谿』)

の一句。ともに上昇方向の動きをとらえた句だ。龍太の句は、山里の春の生命感を躍動的に詠ったものだが、八束の句は、雪の白さにつばくらの「鈴」のような細かな声がはね返る。龍太作が視覚の句だとすれば、八束作は「聴覚+視覚」の複合技の句。龍太は春のどかさに呼応するようにゆったりとした動きを詠み、八束は雪山の清冽な大気に包まれて「鈴」のような声の響

きを詠う。龍太は一句一章、八束は二句一章。

あらためて八束の詩的作風を知らされた一句であった。

夜は碧く雪稜線のよみがへる

(昭和三十一年)

これも志賀高原発哺での作。随筆集に、「雪稜線」という僕の拙い造語は、高いリフトにぶらさがってあたりの雪山を眺めてゐるときに胸に浮かんだ。自からの貧しい句業の稜線も白く空中に浮いてあたりの雪山のやうに澄んではかなげに思へぬでもなかつた」(『秋琴帖』)と舞台を明かしている。夜の句だから夜にできたとは限らない。夜の風景に接しての感激が、脳裏にゆっくりしみこんで、また胸にもしずかに沈み込んで、ある日、あらためて立ち上る理性と心情が交差しスパークする瞬間、あらたな詩語が誕生する。

「雪稜線」の語は、(落つ日はや雪稜線に焰をちらす 八束)(昭和三〇年)という句で一年ほど前に使われている。このときの雪嶺を染める落日風景も印象鮮明だが、「夜は碧く」の句になると、いったん闇に沈み込んでいたものが、ふたたび妖しく浮かび上がってくるような、幻想的な風景となる。雪の稜線が、ほの蒼く自らの光を放ち始めたようではないか。落日の太陽のあと、月の出に照らされてのことでもあるうが、自然現象に照らし合わせてというよりも、多分に八束の心象に引き寄せた幻想かもしれない。

「雪稜線」という造語、及び「よみがへる」とのこなれた連結により、この句は近代詩的な装いをまとうことになった。「俳句に造語はいけない」と咎める向きも多いが、古の言葉を引き寄せ、さらに「現在」を映す新しいことばを造ることは、詩の原点ではないか。そんな気概が、八束の諸作からは伝わってくる。

木枯や当引吊りの坑夫の坂

『八束唱三百句』

(昭和五十一年)

「当引は藁で作った尻当て」と後註がある。足尾銅山での吟行句。「アテヒコ」については、釧路炭田の貴重な写真がインターネットのサイトで見られた。

ところで、この句の初出形は、

油照る当引(あてひこ)づりの坑夫の坂

石原八束

『雪稜線』(昭和三年)

となっている。以降の二冊の全句集などには初出の形のまままで載っているが、

『八束唱三百句』（四季文庫・昭和五十一年）及び「俳句研究」（昭和五十一年二月号「石原八束自選二〇〇句」）に至って冒頭の句の形に改作されている。この改作は成功した例だと思う。

初出形と改作とを比べてみよう。まず、初出形の「油照る」では、たんにぎらぎらした照り返しに労働の苦難のみが強調されるようで、せつかくの「当引吊り」という独特の軽妙な語の響きが殺がれてしまう。その上、「油照る」という動詞形は季語としても句の切れとしても、どうも落ち着きが悪い。

大胆に季語を夏から冬へと移した改作の方は、「木枯」が乾いて句を軽くしている。季語「木枯」の乾いた拈がりの中に、坑夫たちの生活の悲哀が一刷けされているかのようだ。加えて、切れ字の「や」により、句にはつきりとした「切れ」が生まれたことも大きい。当引を吊った坑夫たちが坑道へと坂道に足を運ぶ、その風景がより鮮明に見えてくる。尻当ての「当引」をして、みんな木枯しに吊られて坂を進んでいくようにも感じられよう。

滴りやカンテラ一つ研ずりにおき

（昭和三十一年）

もう一句鉦山の句を引いておこう。「研（ずり）」については、後註に「発破された鉦石・岩石を研といふ」とある。坑道の壁には水がにじみ出て滴っている。坑道の突当りには、発破して崩れた岩石のかげらが散り敷かれていて、そこにカンテラを置いた。そのカンテラの灯を中心に、滴りや鉦石の破片などがきらきらと光りはじめた。別に、（滴りと鉦（はく）とを照らす生命の灯）とも詠んでいる。狭いながらも、地下の岩石に包まれた幻想的な世界が、一瞬作者の前に現れたのだ。

坑夫たちにとっては、生死を賭けた毎日の過酷な仕事の場所にちがいないが、訪問者の八束には異質な美に向き合う結果になった。

ところで、足尾銅山の吟行にあたって、八束は鉦山の用語を大分積極的に収集した。これも八束の句作の特徴の一つだ。「坑内（しき）」「切羽（きりは）」「導火線（みちび）」「坑壁（どべら）」「鉦（はく）」「坑口（しき）」「研（ずり）」「昇坑（あがり）」「研山（ずりやま）」「坑外（おか）」他、造語的なものも混じっているかもしれないが、新しい季語を発掘するのと同様に、坑夫の生活の中から新しい言葉を俳句に盛り込もうともした。郷に入れば郷に学べ、とでもいうべき八束の姿勢は一貫している。謙虚な詩人の態度であろう。生活圏ごとに、その中で息づいている未知のことばがある。それを訪ねながら、現代の新たな俳句の世界を深めたいと、八束は願っていたのだろう。

月光に目覚めをるらむ幼な露

(昭和三十一年)

前書に「即ち清純浄香禅童女に」とある。飯田龍太の次女純子(六歳)を急逝小児麻痺で失ったときの、葬儀に参列しての哀悼の句。「いまごろは月の光に目覚めていることだろう。童女の幼い露の命は」というような意味であろう。ただ、下五は「(まだ結んで間もない)幼い夜露」とも読める。童女の霊が小さな露に乗り移って、月光の下、不思議そうにつぶらな目をひらいている気配もする。この「露」が、この世と彼の世との接点。幻想的な世界の中に、清らかな童女の魂が安らぎのように伝わってくればくるほど、龍太(当時三六歳)の辛さを思ってやまない。いまや、八束も龍太もこの世を去ってしまった、ますます思い入れの深い句となった。

秋の爐をすこしさがりて子をあやす

(昭和三十一年)

私は昭和三十一年生まれ。この句を読むたびに、晩婚であった先生は、私の生まれた年には、俳句を詠みながら子守も佳境だったんだな、と微笑ましく感じる。八束は三七歳。「馬酔木」に「内観造型への試論」を発表するのもこの年。

すでに、俳句の骨格は出来上がっていたから、こんな育児俳句も、さらりと詠みながら心もちに「秋の爐」の季節感を通わせている。もちろん、爐から少し離れるのは、子の安全を考えての父親としての愛情。「爐」という漢字が重く見えればみえるほど、中七以下のひらがなが子守唄のようにやさしく柔らかく感じられる。そして、「秋」の季節から引きだされる哀愁もほんのりとただよう。

「すこし」という措辞は、慎ましさの押し付けのように感じられて失敗することが多いが、この句では、比較的すなおに受け止めることができるように思う。「すこし」「さがりて」とサ音のくり返しもその一因。愛情を含みながらべたついた感じがしないのも、この中七のさらさらした「サ」音と、下五の自然な先すばまりの「す」に拠るところが大きい。

幸うすき掌をあたためよ雪ふらむ

(昭和三十一年)

八束のやさしい心根がにじみ出たような句。句意は明らかであろう。誤解を避けるために言えば、八束は癩癩持ちでもあったし、内に鬱屈したものを

抱え込んだままの生涯でもあった。人生の「負」の意識を持ちながら、同時に非常に強い完璧主義でリゴリズムを譲らず生涯を閉じたともいえる。しかしながら、八束の作家精神の厳しさと同時に、人にさしのべるやさしさもまた比類ないものであった。

この第二句集『雪稜線』では、家族を持つようになったことも一因であるが、束の間であれ、大分気持ちにゆとりが生まれて、三好達治の詩から学んだ純真な抒情がやわらかく流れはじめている。幸を願っての祈りに通じてゆくような心のもち方は、いつの間にか（降る雪や玉のごとくにランプ拭く飯田蛇笏（昭和二四年））を呼び寄せてくる。蛇笏のは最晩年、八束は壮年期の作である。

時折は、こんな主情的な句を心の中に住まわせてもみるのもよい。

子の匙の響く雪夜の稿すすむ

（昭和三二年）

この句集には八束のやさしい気持がこもった句が多い。読者である私の方も癒される。この句は、子どもの夕食風景であろう。子どもの匙の音が響いているが、雪によって幾分やわらいだ音になって隣りの書齋にとどいてくる。童話的で抒情的な句だ。前述の（鍵穴に雪のささやく子の目覚め）に似た装いの句とも言える。「匙」が子の世界を、「稿」が父親の世界を暗喩し、単なる日常生活の報告にとどまらない広がりを感じられる。「匙」と「稿」の取り合わせも、なかなか近代的な新味が感じられるではないか。

親にとつて何より幸せなのは、やはり子どもが育ってくれていることだ。子という小さな生命がすくすくと育っていることで、八束のこころも癒され励まされ、思索の回路も明晰になり、難渋していた原稿の方もようやく進み始めたようだ。締め切りに追い立てられて、妻子と夕食を共にできないのは忸怩たる思いもあるが、それでもここを乗り切れば、明日には原稿を届けることができる。天の岩戸が開いたとまでは言わないが、ようやく薄ら日の覗いた心境ではないか。こうして、八束の徹夜に近い執筆作業は生涯続いたのであった。

俳壇のバルザック。このイメージを八束に対し温めてから久しくなる。

仔馬帰る月夜雪稜線を負ひ

（昭和三二年）

これも抒情の通った幻想的な句。句意は、はぐれた仔馬がとぼとぼと帰路を辿っている。月に照らされて浮かび上がった雪稜線を背負うようにしながら

ら、とでもなるうか。先の、〈夜は碧く雪稜線のよみがへる〉でも述べたが、「雪稜線」は八束の造語。この句では、「月夜」という伝統的な抒情の世界に、「雪稜線」という現代詩的な造語がぎくしゃくせず融け込んで、虚構的な幻想美の世界を生み出している。

「はぐれた仔馬」とは言ってしまったが、この句を読むと、はぐれたことに対する切迫感や危機感ほとんど感じられない。道草を食った子が勝手知った家路を辿るように、この仔馬も「雪稜線」の妖しい光の降る中を、しよげ返るでもなく、急ぐでもなく、しかしながら運命にせずかに導かれているかのように、従順にどこまでも家路を辿っているという感じがする。

この仔馬の句には、弱冠三七歳の八束の人生行路が暗喩されているのかもしれないが、ここには、現実根ざしながらも、事実を超えた虚構による造形の中に幻想美を見つけ出す八束の句の特色がよく出ている。

謝肉祭酔歌をうたふ木馬の背

(昭和三二年)

「謝肉祭酔歌」三一句の第一句。句集『雪稜線』の中でも、異質で解放感にあふれた連作。音楽ならばさしずめ奇想曲とも言おうか。この句に続いて〈日傘咲く虜囚の浜の謝肉祭〉〈艦隊の基地を沖にす謝肉祭〉が続く。戦後の影を落としながらも、仮装したり、羽目を外したり、洋風の解放感をいつとき楽しんでいるさまが描かれる。

この句は、盛り上がるカーニバルの祭り騒ぎの中で、メリーゴーラウンドに乗ってほろ酔い気分であつて歌をうたっている作者の心象が描かれている。春の謝肉祭の浮かれ気分は、八束がこれまでに味わったことのない自由に満ちたものであつたのではないか。

ただ、八束は若者たちのあらわとも言えるほどの解放感の中には直に飛び込むことはできない。羨ましく思いながら、自らはひとり木馬の背に乗って自由な雰囲気の中で酔っているのみ。どことなく違和感と孤独感が流れ出してくるのを感じはしまいか。それでも、春のもてこし遅き青春の翳りをしよげかに味わっている。

謝肉祭の乳房二十ノツトに飛ぶ

(昭和三二年)

これも今となつては想像するしかないのかもしれないが、謝肉祭の浜に近く、裸体の女性がヨットやモーターボートにでも立って、剥き出しの乳房を誇らしげに耀かせながら、観衆の目を引いて過ぎてゆくイメージだろうか。

二〇ノットはおおよそ時速三七キロ。見せ物になるにはちようどよい速度かもしれない。実際は、もちろん全裸など許されないだろうから、仮装などをそのように八束が感じとったのだろう。

謝肉祭という春祭の中で、突然トリックスターのように「二十ノットに飛ぶ乳房」が現れて、観衆の昂りを一気にあおる。なかなかの演出ではないか。こんな句を見ると、昨今のエロ煽りの画像なんかよりも、ずっと人間的な躍動の歓びが伝わってくる気がする。

素顔さへ仮面にみゆる謝肉祭

(昭和三二年)

これも謝肉祭シリーズの一句。前述の「二十ノットで飛ぶ乳房」の直後にある。仮装したり、仮面をしたり、皆それぞれに日常から離れようとして集まっているのだろう。中には素顔の人もいるが、それさえも仮面に見えてしまう。

この一句だけを独立で読むとき、海辺という舞台設定は消える。まわりの風景は消えて、「素顔」と「仮面」と「謝肉祭」のみがのこる。やや理の入り込んだ見方でもあるが、素顔も仮面も春日に包まれて混然としているところが面白い。

「謝肉祭」という新しい文化の動きに反応して、早々と「素顔さへ仮面にみゆる」という典型を詠んでしまった八束の、したたかな作家の姿勢を感じとった句でもある。

謝肉祭の肺ルンゲの孤独海に染まず

(昭和三二年)

〈謝肉祭酔歌をうたふ木馬の背〉でも触れたように、謝肉祭の熱気にどことなく控えてしまう八束の胸中には、倫理感がストイックな姿勢を強いているばかりでなく、やはり青春時の結核の影が尾を引いていたのだろう。海の青に象徴されるエネルギーな青春の色。八束の心の色はこれとなじめな。孤独は「肺（ルンゲ）」にあるのだ。

もちろん、この句の坐五の「海に染まず」は、〈白鳥は悲しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ 若山牧水〉を踏まえているに違いない。八束の場合は「白鳥」の「白」にはなり得ない「肺」の翳りがいつまでも付き纏っていたのではないか。

謝肉祭という祝祭の中で、いつそう孤独感をつのらせる八束の心中が興味深く知られる作でもある。

謝肉祭の血の係蹄が肌ゆるす

(昭和三二年)

これも謝肉祭の歯止めのきかない興奮の陥穽を抉り出したような作。「係蹄(けいてい)」とは「畏」のこと。足に引つ掛ける縄のようなものだったらしい。謝肉祭の昂りの果てに、肌を許してしまふ女性もいる。それは、人間の「血」そのものが「畏」であるから、というのだろう。ふつうならば「血といふ畏」とでもするのだろうか、さすがに、「係蹄」という語を得て「血の係蹄」は表現が引き締まっている。

「カインの末裔」とは多少意味合いが異なるが、それでも「性(さが)」とでもいうべき血がわれわれの体には流れている。他にも、胸乳打つ魔は夜のもの(謝肉祭)という句を詠んでいるが、「魔」を引き出してくるところが八束らしい。

謝肉祭のどろどろの盛り上がりの中を傍観しながらの、八束の教訓めいた醒めた態度を感じるが、この正義感みたいな警句めく物言いも、いまの時代から見るとけっこう滑稽を孕んでいる。

白露の瞳はかなしみの鈴をふる

(昭和三二年)

ここで謝肉祭から日常に戻ろう。先の(月光に目覚めをらむ幼な露 八束)の延長上にあるような装いの句だ。もっとも、この句には人物は登場しない。魂が乗り移ったかのような「白露」につぶらな瞳を感じるのみ。しかも、その瞳の光は、「かなしみの鈴をふる」という。

「かなしみ」が「鈴の音色」になるとは、当時の私には思いもよらないことだった。先の(つばくらの鈴たちのぼる雪の峯 八束)でも鈴の音は出てくるが、こちらは「燕の声」が「鈴の音」に喩えられただけ。対して、「白露」の句の方は、「白露」に「瞳」を感じ、その瞳の奥に「かなしみ」を感じ、その「かなしみ」の奥から「鈴の音」が細やかに聞こえてくる。比喻と見えども、「視覚」↓「気持」↓「聴覚」と三層の万物照応(コレスポンデンス)を成している。

しかも、その結果が、いかにも小手先で、頭の中だけで、ただこしらえたという不自然さを感じさせないのがよい。こう表現されると、これまで観念でしか捉えられなかった「かなしさ」が、より具体的に表情をもって、自分の心の中に棲みつくように感じられるのだ。

波の刃を暮天にのこす秋の汐

(昭和三二年)

「崖―陸中海岸舟行」の章で、「種市海岸」の前書がある。三好達治との旅の一齣であろう。「波の刃」とあり、「秋の汐」とあり、若書きのきらいはあるが、新しい方向を模索している句として印象に残っている。

「波の刃」という比喻自体にはさして驚かないが、それが残像のようにいつまでも「暮天」に残っているというのだ。この視点の移動性に惹かれる。「秋の汐」がある限り、「波の刃」は暮天に残っている。のちに自ら主張した「俳句は自動詞の詩である」の原則に従えば、この句は「波の刃は暮天にのこり秋の汐」とでもなる。だが、「のこり」だと「波の刃」には穏やかすぎで不相応だ。ゆえに「のこす」としたのではないか。

日暮の闇が迫れば迫るほど、天に吊られた「波の刃」は、「雪稜線」のようにいよいよ妖しく耀き始めるのか、それとも闇の中に光を薄めてやがて消えてゆくのか。その分岐点が、この「秋」の「日暮」でもあり、「波の刃」が八束の心情を深いところで映し出している。その意味では、ぎごちなさは残るものの、内観造型のはしりのような句とも言えよう。

汐燃ゆる白亜紀化石断崖秋の風

(昭和三二年)

昨日に続く旅吟の一句。コイコロベとは、岩手県下閉伊郡田野畑村の鳥越の海岸の地名。この付近には白亜紀層における海棲動物の化石が豊富に見つかるとのこと。断崖にも一億年以上も昔の化石が露出されているのだろう。

夕日が汐をいちめに染めて、断崖も赤く染め上げられて屹立する。海を生命を孕んだ深い時間が目の前に立ち上がっているのだ。その厳しい断崖も、「こいころべ」という音韻によって、小さな化石がころころとひしめき合っているような印象を与える。

八束個人の寿命をはるかに超える時間。原初的なイメージが眼前に具体的に現出していることに、何よりも八束は感激したのだろう。芭蕉でさえ、これほど大きな時間を描くことはなかった。その手ごたえを一種の安らぎと共に得たのではないか。「秋の風」も深い時間の中を吹きわたっているかのような感じを与える。

羞明の雪見て玩具鳴らしをり

(昭和三二年)

「自画像」の前書あり。「羞明」とは、普通の光が異常に眩しく感じられて、眼が痛くなったり、涙が出たりする状態をいう医学用語のようだ。そのような言葉を持ち込んだところに、この句の冒険精神がある。

句の意味は、「(涙が引き出るほどの)あまりにも眩しい雪の光に接して、私は子どもをあやす「玩具」を鳴らしていることよ」とでもなるうか。「羞明」の「羞」の文字が、どこことなく八束の含羞を彷彿とさせる。

前書にあるとおり、「自画像」には違いないが、この句は四十歳近くなる男が子どもをあやしなから、鬱屈めいた哀しさに引き起こされた「涙」を照れ隠ししているようにも感じられる。すなわち、韜晦めいた自嘲の句。

純粹な「雪」のまぶしさの前に、何が八束の心を哀しくさせているのだろう。それは、いつかのへパイプもてうちはらふ万愚節の雪 八束へに流れていたものと似ているかもしれない。

【「序にかへて」に見る三好達治の最期】

第二句集『雪稜線』は、敬愛してやまなかった詩人・三好達治の霊前に捧げられた句集であった。「序にかへて——三好先生のこと——」は一八ページにわたる。三好達治の最期を書きとどめたこの随筆は、貴重な資料にもなるろう。

「青木先生は杜甫は嫌ひだといふんだよ。これには異論はあるのだが、李太白ならば茶碗酒をあほり乍ら読むと註釈なんかいらなと言ふんだから面白いね。『酒中の仙人』も後世に知己を得た訣だ。かなはん、かなはん」かなはんは二度続けて言はれたが、そこでグツといつもの心臓神経症（ヘルツ・ノイローゼ）をおこし、脈搏の歇滞するのに耐へて、すこし泪ぐむのであった」

出だし付近の、この一節が私は好きで、いつも読むと目頭が熱くなる。三好達治には酒にまつわるエピソードも多いが、基本にはこの持病があった。酒が入らないと常人のように楽にはならないとは、他の人生の諸問題もあつたとは言え、根本的になんと苦難な生涯だったのかと改めて思う。

稀れに木の葉の飛ぶさへや

久しきときをもてあそぶ

という長詩「百たびののち」のこの一節は、八束も好んでよく朗誦したが、現代俳句にこの瞬間性と永遠性を同時に閉じ込めることは至難の技だろう。達治のこの詩境を知ってしまったがために、八束は平俗な俳句に妥協するとはなかった。

「序にかへて」に綴る達治の生涯は、

万事傷心目前にあり

一身憔悴花に對して眠る

という達治の愛誦していた司空曙（しくう・しよ）の詩を引いて終わる。睡眠剤に助けを借りながら、最晩年までしばしば夜を徹しての文筆を進めた八束の最後まで、なにか達治と似通っているような気がしてならない。